

昭和14年(1939年)

マスノウグワ発見

先生と生徒が一緒に発見した新種の桑の木「マスノウグワ」。益田農林の校名が入った学名が付けられました。

○新種の桑の木を発見したということ
は、とてもすごいことだと思いました。
益田農林の校名がもたくなって命名さ
れたということ、生徒も先生も誇ら
しい気持ちになったことでしょう。益田
農林では、この時代、養蚕や家畜の飼育
や醸造など幅広い農業分野の実習をす
ることに力を入れていました。現在の
私たちにはそのような授業はとても考
えられません。その歴史の上に益田
清風があるということは知っておきた
いことです。私たちも昔の先輩たちが
してきたような新たな発見をするため
に、新たな挑戦を学校生活のいろいろ
な場面でどんどんしていきましょう。
また、先生と生徒、人と人との関わりも
大切にしていきましょう。



マスノウグワの標本

○益農のある萩原の町は、人情、風俗
が素朴で、純情な伝統をもっている
し、またいたずらに時流に俗化してい
ない。この町の丘陵の一角に益農の偉
容が横たわっている。萩原の優れた精
神的な伝統は益農にもにじんでいる
ように思われる。

○私が赴任したのは昭和13年の年
度始で、時あたかも日華事変に次ぐ第
二次世界大戦のさなかである。校内の
あちこちには「欲しがりません、勝つ
までは」といったスローガンを刷った

ポスターが貼られてあった。そしてそ
れが至上命令のごとく、節約や耐乏生
活が強いられた。当時の教職員や生徒
たちは、それが当然のことのように受
け止め、何の抵抗も感じなかった。こ
のような生活感覚は、戦後に生れた今
の生徒諸君には無縁のことかもしれな
い。戦前は何の屈託もなく、平和であ
った益農の学園も、戦争の推移につれ
て次第に落ち着きを失い、オシログラ
フィのように動的な渦に巻き込まれて
いった。益農時代に二度までも招集令
状を受け取った。軍服姿で教職員や生
徒諸君と萩原駅で名残を惜しみながら
汽笛一声、黒煙のなかへ消えていつた
のである。

○巻脚絆に地下足袋で身を固め、農場
実習や養蚕実習に汗を流したことは、
当時の懐かしい思い出である。益田川
河岸の広場で生徒の余技としてグライ
ダーの訓練がしばしばおこなわれた。
主要年中行事である御岳登山、益農名
物となっていた秋の運動会などは記憶
に新たなものがある。

○飛騨は植物の植生上、たいへん興味
深い地帯となっている。植物分類を専
門とする私は、桑の分類や生態を探る
ため、時折生徒諸君とともに山野へ桑
の採集に出かけた。たまたまこの地帯
で桑の変種と新種を発見し、次の学名
を創設した。マスノウグワとツトウグ
ワである。マスノウグワは益田農林学
校を、ツトウグワは在職中の校長であ
った鍵谷傳先生を記念して命名したも
のである。この思いもよらぬ収穫は、益
農にお世話になっていたおかげで、い
まだに喜んでいる。

堀田禎吉(農学博士 京都工芸繊維
大学教授)「益校五十年」より

